

BUZANO の不等式とその拡張について  
(BUZANO INEQUALITY AND ITS EXTENSION)

大阪教育大学 富永 雅 (Masaru Tominaga)  
Osaka Kyoiku University

1. 序

1963年、Wilf [20] は、複素数に対して、次の様な逆算術幾何平均不等式を示した：複素数  $t_1, \dots, t_n$  に対して

$$(1.1) \quad |\arg t_i| \leq \phi \leq \frac{\pi}{2} \quad (i = 1, \dots, n)$$

を仮定する。このとき

$$(1.2) \quad |t_1 \cdot t_2 \cdots t_n|^{\frac{1}{n}} \leq (\sec \phi) \frac{1}{n} |t_1 + t_2 + \cdots + t_n|.$$

が得られる。事実、仮定 (1.1) より

$$(1.3) \quad \cos \phi \cdot (|t_1| + |t_2| + \cdots + |t_n|) \leq |t_1 + t_2 + \cdots + t_n|$$

なので、算術幾何平均不等式より、不等式 (1.2) が導かれる。

その後、Diaz と Metcalf [2] は、 $\langle \cdot, \cdot \rangle$  で内積が定義されたヒルベルト空間  $\mathcal{H}$  におけるベクトルの場合について、その結果を拡張した：

**Diaz-Metcalf 不等式.**  $z$  を  $\mathcal{H}$  上の単位ベクトルとする。  $x_1, \dots, x_n \in \mathcal{H}$  を不等式

$$0 \leq r \leq \frac{\operatorname{Re} \langle x_i, z \rangle}{\|x_i\|} \quad (i = 1, \dots, n)$$

が定数  $r$  をもつよう与える。このとき、次の不等式

$$r \sum_i \|x_i\| \leq \left\| \sum_i x_i \right\|.$$

が得られる。

[9, Theorem 9] において、Diaz-Metcalf 不等式は、Selberg 不等式と関係づけられ、次のように拡張された ([12]):

**定理 A.**  $z_1, \dots, z_m$  を  $\mathcal{H}$  上のベクトルとする。  $x_1, \dots, x_n \in \mathcal{H}$  を、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して不等式

$$0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle x_i, z_j \rangle}{\|x_i\|} \quad (i = 1, \dots, n)$$

が定数  $r_j$  を持つよう与える。このとき、  $y \in \mathcal{H}$  が  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\langle y, z_j \rangle = 0$  を満たせば

$$|\langle x_1 + \cdots + x_n, y \rangle|^2 + \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \|x_i\| \right)^2 \|y\|^2 \leq \left\| \sum_i x_i \right\|^2 \|y\|^2$$

が成り立つ。但し、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle z_h, z_j \rangle|$  とする。

次に、Buzano 不等式を紹介する。ここで、 $\mathcal{B}(y_1, y_2)$  ( $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$ ) を次のように定める：

$$\mathcal{B}(y_1, y_2) := \frac{1}{2}(\|y_1\| \|y_2\| + |\langle y_1, y_2 \rangle|).$$

任意の  $x, y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  に対して不等式

$$|\langle x, y_1 \rangle \langle x, y_2 \rangle| \leq \mathcal{B}(y_1, y_2) \|x\|^2$$

が成り立つ。もし、 $y_1 = y_2$  ならば、Schwarz 不等式になる。

拙稿 [8] において、Selberg と Buzano との同時拡張不等式を導いた：

**定理 B.**  $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  ( $k = 1, 2$ ) が 0 でないベクトル  $\{z_j; j = 1, 2, \dots, m\} \subset \mathcal{H}$  に対して  $\langle y_k, z_j \rangle = 0$  を満たすとき、不等式

$$(1.4) \quad |\langle x, y_1 \rangle \langle x, y_2 \rangle| + \mathcal{B}(y_1, y_2) \sum_j \frac{|\langle x, z_j \rangle|^2}{\sum_h |\langle z_h, z_j \rangle|} \leq \mathcal{B}(y_1, y_2) \|x\|^2$$

がすべての  $x \in \mathcal{H}$  に対して成り立つ。

本稿では、Diaz-Metcalf 不等式と Buzano 不等式に関する 定理 A, B における不等式の同時拡張を導く。応用として、拡張した Heinz-Kato-Furuta 不等式の改良を行う。更に、Furuta 不等式と chaotic order を用いることにより導かれる不等式についても触れる。

## 2. Diaz-Metcalf 不等式と Buzano 不等式の同時拡張

まず、Diaz-Metcalf 不等式と Buzano 不等式の同時拡張を与える：

**定理 2.1.**  $z_1, \dots, z_m$  を  $\mathcal{H}$  上の 0 でないベクトルとする。  $x_1, \dots, x_n \in \mathcal{H}$  を、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して不等式

$$0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle x_i, z_j \rangle}{\|x_i\|} \quad (i = 1, \dots, n)$$

が定数  $r_j$  をもつよう与える。このとき、 $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  が  $k = 1, 2$  と  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\langle y_k, z_j \rangle = 0$  を満たせば

$$(2.1) \quad \left| \left\langle \sum_i x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i x_i, y_2 \right\rangle \right| + \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \|x_i\| \right)^2 \mathcal{B}(y_1, y_2) \\ \leq \mathcal{B}(y_1, y_2) \left\| \sum_i x_i \right\|^2$$

が成り立つ。但し、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle z_h, z_j \rangle|$  とする。

**証明.** 次の不等式により、(2.1) が得られる：

$$\mathcal{B}(y_1, y_2) \left\{ \left\| \sum_i x_i \right\|^2 - \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \left( \sum_i \|x_i\| \right)^2 \right\}$$

$$\begin{aligned}
&\geq \mathcal{B}(y_1, y_2) \left( \left\| \sum_i x_i \right\|^2 - \sum_j \frac{(\operatorname{Re} \langle \sum_i x_i, z_j \rangle)^2}{c_j} \right) \\
&\geq \mathcal{B}(y_1, y_2) \left( \left\| \sum_i x_i \right\|^2 - \sum_j \frac{|\langle \sum_i x_i, z_j \rangle|^2}{c_j} \right) \\
&\geq \left| \left\langle \sum_i x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i x_i, y_2 \right\rangle \right|.
\end{aligned}$$

ここで、3番目の不等式は、定理 B により成り立つ。  $\square$

次に、不等式 (2.1) の拡張を導く：

**系 2.2.**  $T = U|T|$  を  $\mathcal{H}$  上の作用素  $T$  の極分解とする。  $z_1, \dots, z_m$  を  $\mathcal{H}$  上の 0 でないベクトルとし、  $\alpha, \beta$  を  $\alpha + \beta \geq 1 \geq \alpha$  を満たす非負数とする。  $x_1, \dots, x_n \in \mathcal{H}$  を、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して不等式

$$0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle x_i, z_j \rangle}{\|x_i\|} \quad (i = 1, \dots, n)$$

が定数  $r_j$  をもつよう与える。このとき、  $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  が  $k = 1, 2$  と  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\langle |T^*|^{\beta+1-\alpha} y_k, z_j \rangle = 0$  (resp.  $\langle T|T|^{\alpha+\beta-1} z_j, y_k \rangle = 0$ ) を満たせば

$$\begin{aligned}
(2.2) \quad &\left| \left\langle \sum_i T|T|^{\alpha+\beta-1} x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i T|T|^{\alpha+\beta-1} x_i, y_2 \right\rangle \right| \\
&+ \mathcal{B}(|T^*|^\beta y_1, |T^*|^\beta y_2) \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \| |T|^\alpha x_i \|^2 \right)^2 \\
&\leq \mathcal{B}(|T^*|^\beta y_1, |T^*|^\beta y_2) \left\| \sum_i |T|^\alpha x_i \right\|^2
\end{aligned}$$

が成り立つ。但し、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle |T^*|^{2(1-\alpha)} z_h, z_j \rangle|$  (resp.  $c_j = \sum_h |\langle |T|^{2\alpha} z_h, z_j \rangle|$ ) とする。

**証明.** 定理 2.1 において  $x_i, z_j, y_k$  をそれぞれ  $|T|^\alpha x_i, |T|^{1-\alpha} U^* z_j, U^* |T^*|^\beta y_k$  (resp.  $U|T|^\alpha x_i, U|T|^\alpha z_j, |T^*|^\beta y_k$ ) に置き換えることにより得られる。  $\square$

### 3. Extensions of Heinz-Kato-Furuta 不等式

[15] において、古田は、Heinz-Kato 不等式を次のように拡張した：

**Heiz-Kato-Furuta 不等式.**  $A$  と  $B$  を  $\mathcal{H}$  上の正作用素とする。  $T$  が  $T^*T \leq A^2$  と  $TT^* \leq B^2$  を満たすとき、

$$|\langle T|T|^{\alpha+\beta-1} x, y \rangle| \leq \|A^\alpha x\| \|B^\beta y\|$$

が任意の  $x, y \in \mathcal{H}$  と  $\alpha + \beta \geq 1$  を満たす  $\alpha, \beta \in [0, 1]$  に対して成り立つ。尚、  $A$  と  $B$  が逆作用素ならば、条件  $\alpha + \beta \geq 1$  を必要としない。

この不等式は、種々の一般化が考察されている ([9], [10], [11])。本章では、系 2.2 を適用し、Heinz-Kato-Furuta 不等式を拡張する。そのために、次の補題を提示する ([8]):

**補題 C.** ある  $B \geq 0$  が  $TT^* \leq B^2$  を満たしているならば、 $\beta \in [0, 1]$  に対して

$$B(|T^*|^\beta y_1, |T^*|^\beta y_2) \leq \|B^\beta y_1\| \|B^\beta y_2\|$$

が任意の  $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  に対して成り立つ。

ここで、系 2.2 と 補題 C から次の不等式を導く：

**系 3.1.**  $T = U|T|$  を  $\mathcal{H}$  上の作用素  $T$  の極分解とし、 $z_1, \dots, z_m$  を  $\mathcal{H}$  上の 0 でないベクトルとし、 $\alpha, \beta \in [0, 1]$  は  $\alpha + \beta \geq 1 \geq \alpha$  を満たすとする。 $x_1, \dots, x_n \in \mathcal{H}$  を、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して不等式

$$0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle T x_i, z_j \rangle}{\| |T|^\alpha x_i \|} \quad \left( \text{resp. } 0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle |T|^{2\alpha} x_i, z_j \rangle}{\| |T|^\alpha x_i \|} \right) \quad (i = 1, \dots, n)$$

が定数  $r_j$  をもつよう与える。このとき、ある  $A, B \geq 0$  に対して  $T^*T \leq A^2$  と  $TT^* \leq B^2$  かつ、 $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  が  $k = 1, 2$  と  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\langle |T^*|^{\beta+1-\alpha} y_k, z_j \rangle = 0$  (resp.  $\langle T|T|^{\alpha+\beta-1} z_j, y_k \rangle = 0$ ) を満たせば

$$(3.1) \quad \left| \left\langle \sum_i T|T|^{\alpha+\beta-1} x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i T|T|^{\alpha+\beta-1} x_i, y_2 \right\rangle \right| \\ + B(|T^*|^\beta y_1, |T^*|^\beta y_2) \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \| |T|^\alpha x_i \|^2 \right) \\ \leq \|B^\beta y_1\| \|B^\beta y_2\| \left\| \sum_i A^\alpha x_i \right\|^2$$

が成り立つ。但し、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle |T^*|^{2(1-\alpha)} z_h, z_j \rangle|$  (resp.  $c_j = \sum_h |\langle |T|^{2\alpha} z_h, z_j \rangle|$ ) とする。

次に、更なる拡張のために Furuta 不等式 [13] を引用する：

**The Furuta 不等式.**

$A \geq B \geq 0$  ならば、任意の  $r \geq 0$  に対して

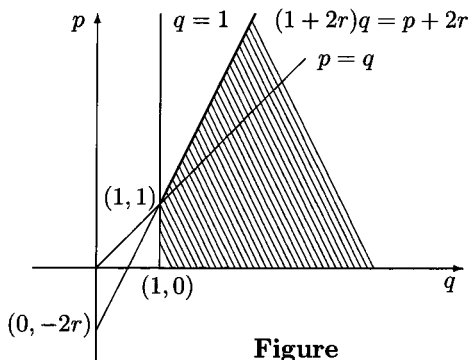
$$(i) \quad (B^r A^p B^r)^{\frac{1}{q}} \geq (B^r B^p B^r)^{\frac{1}{q}}$$

と

$$(ii) \quad (A^r A^p A^r)^{\frac{1}{q}} \geq (A^r B^p A^r)^{\frac{1}{q}}$$

が次の不等式  $(1+2r)q \geq p+2r$

を満たす  $p \geq 0$  と  $q \geq 1$  に対して成り立つ。



Figure

尚、[17] と [3] にもその証明が記載されており、特に、[14] ではその証明が 1 頁でなされている。図中において、印づけられた範囲が、最良であることは棚橋により示されている [18]。また、Heinz-Kato-Furuta 不等式は、[16] において Furuta 不等式を用いることで拡張された。

ここで、Furuta 不等式により、次に示す通り 系 2.2 の拡張を与える：

**定理 3.2.**  $A$  を  $\mathcal{H}$  上の正作用素とし、 $T = U|T|$  は、 $T^*T \leq A^2$  を満たす  $\mathcal{H}$  上の作用素  $T$  の極分解とする。 $z_1, \dots, z_m$  を  $\mathcal{H}$  上の 0 でないベクトルとし、 $\alpha, \beta \geq 0$  は、任意の  $r, s \geq 0$  に対して  $(1+r)\alpha + (1+s)\beta \geq 1 \geq (1+r)\alpha$  を満たすとする。 $x_1, \dots, x_n \in \mathcal{H}$  を、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して不等式

$$0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle Tx_i, z_j \rangle}{\| |T|^{(1+r)\alpha} x_i \|} \quad \left( \text{resp. } 0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle |T|^{2(1+r)\alpha} x_i, z_j \rangle}{\| |T|^{(1+r)\alpha} x_i \|} \right) \quad (i = 1, \dots, n)$$

が定数  $r_j$  をもつよう与える。このとき、 $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  が  $k = 1, 2$  と  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\langle |T^*|^{(1+s)\beta+1-(1+r)\alpha} y_k, z_j \rangle = 0$  (resp.  $\langle T|T|^{(1+r)\alpha+(1+s)\beta-1} z_j, y_k \rangle = 0$ ) を満たせば次が成り立つ：

$$(3.2) \quad \left| \left\langle \sum_i T|T|^{(1+r)\alpha+(1+s)\beta-1} x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i T|T|^{(1+r)\alpha+(1+s)\beta-1} x_i, y_2 \right\rangle \right| \\ + \mathcal{B} (|T^*|^{(1+s)\beta} y_1, |T^*|^{(1+s)\beta} y_2) \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \| |T|^{(1+r)\alpha} x_i \|^2 \right) \\ \leq \mathcal{B} (|T^*|^{(1+s)\beta} y_1, |T^*|^{(1+s)\beta} y_2) \left\langle (|T|^r A^{2p} |T|^r)^{\frac{(1+r)\alpha}{p+r}} \sum_i x_i, \sum_i x_i \right\rangle.$$

但し、 $p \geq 1$ 、かつ、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle |T^*|^{2(1-(1+r)\alpha)} z_h, z_j \rangle|$  (resp.  $c_j = \sum_h |\langle |T|^{2(1+r)\alpha} z_h, z_j \rangle|$ ) とする。

**証明.** 系 2.2 において  $\alpha$  と  $\beta$  をそれぞれ  $\alpha_1 = (1+r)\alpha$  と  $\beta_1 = (1+s)\beta$  とに置き換えることにより次が成り立つ：

$$\left| \left\langle \sum_i T|T|^{\alpha_1+\beta_1-1} x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i T|T|^{\alpha_1+\beta_1-1} x_i, y_2 \right\rangle \right| \\ + \mathcal{B} (|T^*|^{\beta_1} y_1, |T^*|^{\beta_1} y_2) \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \| |T|^{\alpha_1} x_i \|^2 \right) \\ \leq \mathcal{B} (|T^*|^{\beta_1} y_1, |T^*|^{\beta_1} y_2) \left\langle |T|^{2\alpha_1} \sum_i x_i, \sum_i x_i \right\rangle.$$

但し、 $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle |T^*|^{2(1-\alpha_1)} z_h, z_j \rangle|$  (resp.  $c_j = \sum_h |\langle |T|^{2\alpha_1} z_h, z_j \rangle|$ ) とする。次に、Furuta 不等式において  $A, B, r, q$  をそれぞれ  $A^2, |T|^2, \frac{r}{2}, \frac{p+r}{(1+r)\alpha}$  に置き換える。このとき

$$|T|^{2\alpha_1} = |T|^{2(1+r)\alpha} \leq (|T|^r A^{2p} |T|^r)^{\frac{(1+r)\alpha}{p+r}}$$

が得られ、上記 2 式より不等式 (3.2) が導かれる。  $\square$

ここで上記定理において、 $T$  が正、あるいは、可逆であれば、 $(1+r)\alpha + (1+s)\beta \geq 1$  は、必要でない。

$\log A \geq \log B$  により定義される順序は chaotic order と呼ばれ、 $A \gg B$  と表される [4]。対数関数の作用素単調性からこの順序は  $A \geq B$  よりも弱い。Furuta 型作用素不等式の観点から chaotic order の特徴づけが得られる ([5], [6], [7])。そこで、chaotic order により系 2.2 に関わる不等式を与える。このために、次の chaotic order の特徴づけを紹介する ([4], [5], [6], [7], [19]) :

**定理 D.** 作用素  $A, B > 0$  が  $A \gg B$  である必要十分条件は

$$(B^r A^p B^r)^{\frac{1}{q}} \geq (B^r B^p B^r)^{\frac{1}{q}}$$

が  $2rq \geq p + 2r$  を満たす  $q \geq 1, p, r \geq 0$  に対して成り立つことである。

ここで、定理 D を適用することにより、系 2.2 の chaotic 版が導かれる :

**定理 3.3.**  $A$  を  $\mathcal{H}$  上の正作用素とし、 $T = U|T|$  は、 $T^*T \ll A^2$  を満たす  $\mathcal{H}$  上の作用素  $T$  の極分解とする。 $z_i \notin \ker(T^*)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ )、 $\alpha \in [0, 1]$  とする。 $z_1, \dots, z_m$  を  $\mathcal{H}$  上の 0 でないベクトルとし、 $\alpha, \beta \in [0, 1]$  は、任意の  $r, s \geq 0$  に対して  $r\alpha + s\beta \geq 1 \geq r\alpha$  を満たすとする。 $x_1, \dots, x_n \in \mathcal{H}$  を、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して不等式

$$0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle Tx_i, z_j \rangle}{\| |T|^{r\alpha} x_i \|} \quad \left( \text{resp. } 0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle |T|^{2r\alpha} x_i, z_j \rangle}{\| |T|^{r\alpha} x_i \|} \right) \quad (i = 1, \dots, n)$$

が定数  $r_j$  をもつよう与える。このとき、 $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  が  $k = 1, 2$  と  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\langle |T^*|^{s\beta+1-r\alpha} y_k, z_j \rangle = 0$  (resp.  $\langle T|T|^{r\alpha+s\beta-1} z_j, y_k \rangle = 0$ ) を満たせば次が成り立つ :

$$(3.3) \quad \begin{aligned} & \left| \left\langle \sum_i T|T|^{r\alpha+s\beta-1} x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i T|T|^{r\alpha+s\beta-1} x_i, y_2 \right\rangle \right| \\ & + \mathcal{B} (|T^*|^{s\beta} y_1, |T^*|^{s\beta} y_2) \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \| |T|^{r\alpha} x_i \| \right)^2 \\ & \leq \mathcal{B} (|T^*|^{s\beta} y_1, |T^*|^{s\beta} y_2) \left\langle (|T|^r A^{2p} |T|^r)^{\frac{r\alpha}{p+r}} \sum_i x_i, \sum_i x_i \right\rangle. \end{aligned}$$

但し、 $p \geq 0$ 、かつ、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle |T^*|^{2(1-r\alpha)} z_h, z_j \rangle|$  (resp.  $c_j = \sum_h |\langle |T|^{2r\alpha} z_h, z_j \rangle|$ ) とする。

**証明.** 系 2.2 において  $\alpha$  と  $\beta$  をそれぞれ  $r\alpha$  と  $s\beta$  に置き換えることにより次が成り立つ :

$$\begin{aligned} & \left| \left\langle \sum_i T|T|^{r\alpha+s\beta-1} x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i T|T|^{r\alpha+s\beta-1} x_i, y_2 \right\rangle \right| \\ & + \mathcal{B} (|T^*|^{s\beta} y_1, |T^*|^{s\beta} y_2) \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \| |T|^{r\alpha} x_i \| \right)^2 \\ & \leq \mathcal{B} (|T^*|^{s\beta} y_1, |T^*|^{s\beta} y_2) \left\langle |T|^{2r\alpha} \sum_i x_i, \sum_i x_i \right\rangle. \end{aligned}$$

但し、 $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle |T^*|^{2(1-r\alpha)} z_h, z_j \rangle|$  (resp.  $c_j = \sum_h |\langle |T|^{2r\alpha} z_h, z_j \rangle|$ ) とする。次に、定理 D において  $A, B, r, q$  をそれぞれ  $A^2, |T|^2, \frac{r}{2}, \frac{p+r}{r\alpha}$  に置き換える。このとき、

$$|T|^{2r\alpha} \leq (|T|^r A^{2p} |T|^r)^{\frac{r\alpha}{p+r}}.$$

が得られ、上記 2 式より不等式 (3.3) が導かれる。□

次に、Furuta 不等式と 定理 D を補間する Furuta 型作用素不等式を適用することにより 定理 3.2 と 定理 3.3 を補間する次の結論が導かれる：

**定理 3.4.**  $A$  を  $\mathcal{H}$  上の正作用素とし、 $T = U|T|$  は、ある  $\delta \in (0, 1]$  に対して  $|T|^{2\delta} \leq A^{2\delta}$  を満たす  $\mathcal{H}$  上の作用素  $T$  の極分解とする。 $z_i \notin \ker(T^*)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ )、 $\alpha \in [0, 1]$  とする。 $z_1, \dots, z_m$  を  $\mathcal{H}$  上の 0 でないベクトルとし、 $\alpha, \beta \in [0, 1]$  は、任意の  $r, s \geq 0$  に対して  $(\delta+r)\alpha + (\delta+s)\beta \geq 1 \geq (\delta+r)\alpha$  を満たすとする。 $x_1, \dots, x_n \in \mathcal{H}$  を、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して不等式

$$0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle Tx_i, z_j \rangle}{\||T|^{(\delta+r)\alpha} x_i\|} \quad \left( \text{resp. } 0 \leq r_j \leq \frac{\operatorname{Re} \langle |T|^{2(\delta+r)\alpha} x_i, z_j \rangle}{\||T|^{(\delta+r)\alpha} x_i\|} \right) \quad (i = 1, \dots, n)$$

が定数  $r_j$  をもつよう与える。このとき、 $y_1, y_2 \in \mathcal{H}$  が  $k = 1, 2$  と  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\langle |T^*|^{(\delta+s)\beta+1-(\delta+r)\alpha} y_k, z_j \rangle = 0$  (resp.  $\langle T|T|^{(\delta+r)\alpha+(\delta+s)\beta-1} z_j, y_k \rangle = 0$ ) を満たせば次が成り立つ。

$$(3.4) \quad \left\langle \left\langle \sum_i T|T|^{(\delta+r)\alpha+(\delta+s)\beta-1} x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i T|T|^{(\delta+r)\alpha+(\delta+s)\beta-1} x_i, y_2 \right\rangle \right\rangle \\ + \mathcal{B} (|T^*|^{(\delta+s)\beta} y_1, |T^*|^{(\delta+s)\beta} y_2) \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \||T|^{(\delta+r)\alpha} x_i\| \right)^2 \\ \leq \mathcal{B} (|T^*|^{(\delta+s)\beta} y_1, |T^*|^{(\delta+s)\beta} y_2) \left\langle (|T|^r A^{2p} |T|^r)^{\frac{(\delta+r)\alpha}{p+r}} \sum_i x_i, \sum_i x_i \right\rangle.$$

但し、 $p \geq \delta$ 、かつ、任意の  $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle |T^*|^{2(1-(\delta+r)\alpha)} z_h, z_j \rangle|$  (resp.  $c_j = \sum_h |\langle |T|^{2(\delta+r)\alpha} z_h, z_j \rangle|$ ) とする。

**証明.** 系 2.2 より

$$\left\langle \left\langle \sum_i T|T|^{(\delta+r)\alpha+(\delta+s)\beta-1} x_i, y_1 \right\rangle \left\langle \sum_i T|T|^{(\delta+r)\alpha+(\delta+s)\beta-1} x_i, y_2 \right\rangle \right\rangle \\ + \mathcal{B} (|T^*|^{(\delta+s)\beta} y_1, |T^*|^{(\delta+s)\beta} y_2) \left( \sum_j \frac{r_j^2}{c_j} \right) \left( \sum_i \||T|^{(\delta+r)\alpha} x_i\| \right)^2 \\ \leq \mathcal{B} (|T^*|^{(\delta+s)\beta} y_1, |T^*|^{(\delta+s)\beta} y_2) \left\langle |T|^{2(\delta+r)\alpha} \sum_i x_i, \sum_i x_i \right\rangle.$$

が成り立つ。但し、 $j = 1, \dots, m$  に対して  $c_j = \sum_h |\langle |T^*|^{2(1-(\delta+r)\alpha)} z_h, z_j \rangle|$  (resp.  $c_j = \sum_h |\langle |T|^{2(\delta+r)\alpha} z_h, z_j \rangle|$ ) とする。ここで、[6]における不等式

$$|T|^{2(\delta+r)\alpha} \leq (|T|^r A^{2p} |T|^r)^{\frac{(\delta+r)\alpha}{p+r}}$$

を用いることにより、不等式 (3.4) が導かれる。□

#### REFERENCES

- [1] M.L. Buzano, *Generalizzazione della disuguaglianza di Cauchy-Schwarz*, Rend. Sem. Mat. Univ. e Politech. Torino **31** (1971-73). (1974), 405-409.
- [2] J. B. Diaz and F. T. Metcalf, *A complementary triangle inequality in Hilbert and Banach spaces*, Proc. Amer. Math. Soc. **17**(1966), 88-97.
- [3] M. Fujii, *Furuta's inequality and its mean theoretic approach*, J. Operator theory **23**(1990), 67-72.
- [4] M. Fujii, T. Furuta and E. Kamei, *Furuta's inequality and its application to Ando's theorem*, Linear Alg. and its Appl. **179**(1993), 161-169.
- [5] M. Fujii, J.-F. Jiang and E. Kamei, *Characterization of chaotic order and its application to Furuta inequality*, Proc. Amer. Math. Soc. **125**(1997), 3655-3658.
- [6] M. Fujii, J.-F. Jiang, E. Kamei and K. Tanahashi, *A characterization of chaotic order and a problem*, J. Inequal. Appl. **2**(1998), 149-156.
- [7] M. Fujii and E. Kamei, *Furuta's inequality and a generalization of Ando's theorem*, Proc. Amer. Math. Soc. **115**(1992), 409-413.
- [8] M. Fujii, A. Matsumoto and M. Tominaga, *Simultaneous extensions of Selberg and Buzano inequalities*, Nihonkai Math. J. **25**(2014), 45-63.
- [9] M. Fujii and R. Nakamoto, *Simultaneous extensions of Selberg inequality and Heinz-Kato-Furuta inequality*, Nihonkai Math. J. **9**(1998), 219-225.
- [10] M. Fujii and R. Nakamoto, *Extensions of Heinz-Kato-Furuta inequality*, Proc. Amer. Math. Soc. **128**(2000), 223-228.
- [11] M. Fujii and R. Nakamoto, *Extensions of Heinz-Kato-Furuta inequality, II*, J. Inequal. Appl. **3**(1999), 293-302.
- [12] M. Fujii and H. Yamada, *Around the Bessel inequality*, Math. Japon. **37**(1992), 979-983.
- [13] T. Furuta,  *$A \geq B \geq 0$  assures  $(B^r A^p B^r)^{1/q} \geq B^{(p+2r)/q}$  for  $r \geq 0, p \geq 0, q \geq 1$  with  $(1+2r)q \geq p+2r$* , Proc. Amer. Math. Soc. **101**(1987), 85-88.
- [14] T. Furuta, *An elementary proof of an order preserving inequality*, Proc. Japan Acad. **65**(1989), 126.
- [15] T. Furuta, *An extension of the Heinz-Kato theorem*, Proc. Amer. Math. Soc. **120**(1994), 785-787.
- [16] T. Furuta, *Determinant type generalizations of the Heinz-Kato theorem via the Furuta inequality*, Proc. Amer. Math. Soc. **120**(1994), 223-231.
- [17] E. Kamei, *A satellite to Furuta's inequality*, Math. Japon. **33**(1988), 883-886.
- [18] K. Tanahashi, *Best possibility of the Furuta inequality*, Proc. Amer. Math. Soc. **124**(1996), 141-146.
- [19] M. Uchiyama, *Some exponential operator inequalities*, Math. Inequal. Appl. **2**(1999), 469-471.
- [20] H. S. Wilf, *Some applications of the inequality of arithmetic and geometric means to polynomial equations*, Proc. Amer. Math. Soc. **14**(1963), 263-265.